

平成5年度演習林年報

<https://doi.org/10.15017/18587>

出版情報：年報（九州大学農学部演習林年報）。1993, 1994-12-20. 九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：



V. 演習林本部庁舎の新築と組織の再編

九州大学農学部附属演習林の新庁舎が、本部がある箱崎地区から東方約13kmの粕屋郡篠栗町大字津波黒349に完成し、11月11日に学内外から関係者約200人が出席して落成記念式典が行われた。式典では、汰木林長から関係者に対する謝辞と今後の抱負等の挨拶があり、和田総長、五斗農学部長、藤原全演協会長からそれぞれお祝いの言葉が述べられた。

建物は、鉄筋コンクリート一部二階建てで、研究管理棟が延面積1350㎡、学生宿舎棟が延面積938㎡で緑に囲まれた瀟洒な建物である。

これは、平成6年1月17日付け文教ニュースの記事である。ありふれた建物新営の記事ではあるが、平成4年度末から5年度前半にかけての庁舎の建設、および演習林本部の移転とそれに伴う組織の改変は、演習林にとって歴史に残る出来事と思われる。ここに新庁舎の概要を示し、併せて庁舎建設までの経緯について記録しておく。また、演習林本部、粕屋地方演習林、早良地方演習林が統合することにより、大幅な組織の再編が行われたのでその概要を示す。

1. 庁舎の設計の概要

庁舎は平行に並んで渡り廊下で結ばれた2棟で構成される。南側が研究管理棟で、中央の玄関ホールをはさんで西半分は平屋で事務室、事務長室、会議室などがあって主に事務部に使用され、東半分は2階建てで教官室、研究室、実験室、環境制御室、調査室など主に研究部に使用される。中央階段付近2階には小会議室、物品庫など共用的な部分がある。

北側の棟は便宜上学生宿舎棟と呼ばれるが、床面積の半分は研究関連の施設である。1階は図書室、講義室、食堂、厨房、浴室などがあり、2階には展示室、談話室、教官宿泊室、和室、二段ベッドの6人用宿泊室7室等があって、宿泊定員は46人である。

屋根は、玄関ホール部分が切り妻型になっている他は、勾配3/10の寄せ棟型で濃茶色のアスファルトシングル葺きである。外壁は薄いクリーム色の合成樹脂エマルジョン塗装で、根回りには水平に3段の目地を入れ、桜御影を思わせる塗材を使用している。

演習林らしい雰囲気を出すことと教材としての意義を考慮して、内装には可能な限り木材を使用することが心掛けられた。

食堂、小会議室の腰壁と帯には福岡演習林産のスギ材と球磨村産のスギ材を用い、板の厚みと着色に変化をつけた横張りという新しいデザインとした。玄関ホールの出隅の各コーナーには北海道演習林産のミズナラとウダイカンバの厚板をつけ、階段室への入り口には宮崎演習林産のヒメシャラを用いた。また、階段手すりには日田スギの縁桁用磨き丸太を利用し、踊り場の腰壁は福岡演習林産のスギ板材を縦張りした。

林長室、事務長室、教官室、小会議室、および食堂の床には木質フローリングを使用した。これは林産学科の又木教授の仲介により大建工業、東南産業、大鹿振興、段谷産業、山陽住建、岩崎産業、住建産業の各社の製品の提供を受けて実現した。多くの樹種、工法を見ることができ、教材的な価値も大きい。

また、研究管理棟、学生宿舎棟の玄関ホールおよび小会議室のシャンデリアと食堂の照明器具は職員が設計製作したもので、いずれも福岡演習林産のスギ材を使用している。さらに、各室の室名板には北海道演習林産のアサダ（研究管理棟）とカツラ（学生宿舎棟）を用いており、板の加工を

外注した他は全て職員の手作りである。

この他、樹脂加工したものではあるが浴槽と壁にヒノキ板材を用いた小浴室、および宮崎演習林内で採取した石を組み上げて岩風呂の雰囲気を出した大浴室も教材的な意味を考慮した内装の例として挙げることができる。この岩風呂の石積みも職員の手で行われた。

2. 庁舎要求と実現の経緯

演習林本部を粕屋演習林の敷地に移転して、合同の庁舎を建設しようという動きが始まったのは、昭和50年代に遡る。組織の合併については詳しく検討されなかったが、建物については「演習林総合研究棟および管理棟」として昭和53年度から概算要求に載せられた。この時の案は、資料展示室を兼ねたホールから3つの棟が放射状に配置されたプラン（第1次案：RC2F, 3548㎡）で、それぞれの棟が事務部、研究部、宿泊研修に当てられていた。この案では、旧粕屋演習林事務所の裏山を造成して建物用地とする構想が既に示されていた。この第1次案は昭和55年度まで3年間続けられ、56年には面積を2876㎡に縮小したものの実現を見ず、昭和57年には概算要求に挙げることが一旦中止された。昭和58年からは第1次案を平屋にしたプラン（第2次案：RC1F, 1140㎡）を粕屋演習林の庁舎として予算要求していくこととなった。

昭和62年になって演習林本部の統合移転の案が固まり、昭和63年度の概算要求として新たにコの字型平屋の演習林研究管理棟のプラン（第3次案：RC1F, 3094㎡）が登場した。昭和63年の秋には木材の需要拡大との絡みで木造建築なら補正予算で対応するという情報があり、木造2階建てのプランを急遽作成したがこれも不調に終わった。以後、木造案で採用された2棟平行型のプランをRC構造とし、面積も現実的な規模に修正して細部の検討を進め、平成3年度からは現庁舎の原型となったプラン（第4次案：RC2F, 2470㎡）で要求を続けてきた。

建築の基本設計の第1次案は、宮崎、北海道両演習林の研究管理棟の基本設計を手掛けた故加藤教授によるもので、組織の統合を含め演習林全体の基本構想を先見的に提案したものであった。昭和56年の縮小案と第2次案には粕屋演習林長として汰木が携わり、第3次案以降の基本設計と内装の設計は研究部長だった汰木の指揮の下で薛が担当した。

平成4年の補正予算で演習林庁舎建設が急に浮上した背景には、政府の景気浮揚対策と九州大学の移転問題が関係したといわれている。平成3年10月に九州大学は元岡・桑原地区へのキャンパス移転を発表したが、演習林では元岡・桑原地区へは移転せず粕屋演習林への移転を目指すことを決め、平成4年6月の審議会です承されていた。移転を決めた箱崎地区での新営工事が行えなくなったことが演習林庁舎の実現に有利に作用したようである。

予算決定後わずか2カ月で入札という差迫った状況を、上記のような準備の蓄積と事務官技官教官が一体となった協力で乗り越え、第4次案を元にして床面積を規準に合せる修正作業や設備関係の検討が施設部と演習林との間で行われ、最終案が決定された。

敷地の造成は八木山バイパス工事の排土引き受けやボタ山の整地と関連して昭和56年に着手されていたが、平成4年の秋になってさらに地盤を2m下げる造成工事を自力で行うことになり、演習林本部および粕屋演習林のほとんど全職員がこれに携わった。庁舎新築と什器備品の整備に関わる膨大な事務書類を短期間で整えるために、事務長をはじめ事務部の全員が連日相当量の仕事をこなし、学生実習の施設や環境制御室の機器など教育研究に関係する部分では研究部教官が協力した。

庁舎は平成5年1月14日に着工され、7月15日に竣工した。総工費は5億7268万円であった。研究管理棟の玄関の一隅に、庁舎新築に携わった者共通の記念として工事記録の銘板が埋め込まれている。

3. 管理運営組織の再編

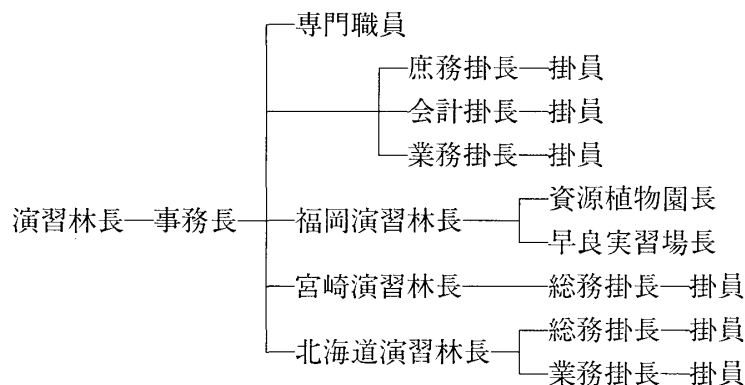
1993年10月に演習林本部庁舎が完成し、演習林本部が農学部キャンパスから粕屋地方演習林に統合・移転されたことにともない、管理運営組織が再編された。

すなわち、これまでの粕屋地方演習林と早良地方演習林とが合併して福岡演習林となり、福岡演習林長のもとに資源植物園長と早良実習場長とが置かれることになった。また、粕屋地方演習林の管理部門は演習林本部事務部に統合され、その管理業務は本部の3掛によって分担処理されている。

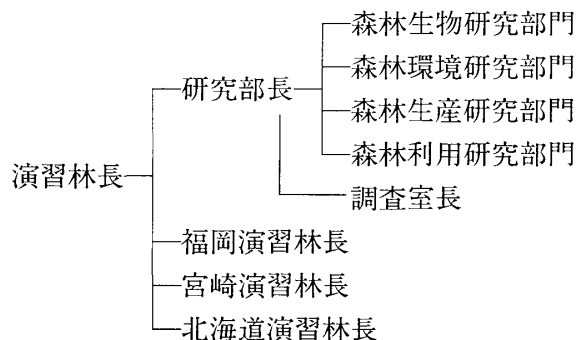
これと同時に、宮崎地方演習林は宮崎演習林に、北海道地方演習林は北海道演習林にそれぞれ名称変更されたが、管理業務は従来どおり各林長のもとで所属の教官、事務官、技官により行われている。

演習林本部には演習林長のもとに研究部と事務部が置かれていることは統合移転後も変わらない。研究部は、統合により教官の本部集中が進み、所属教官数が増加したため、4研究部門が実質的に機能し始めるなど一段と強化された。事務部は事務長のもとに庶務、会計、業務の3掛が置かれ、統合後は粕屋地方演習林の総務掛長は廃止されたが、新たに専門職員が設置されたため、管理運営体制が一段と充実した。

管理・運営機構図

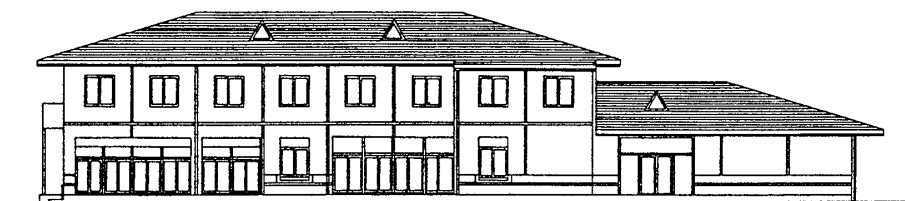


教育・研究機構図

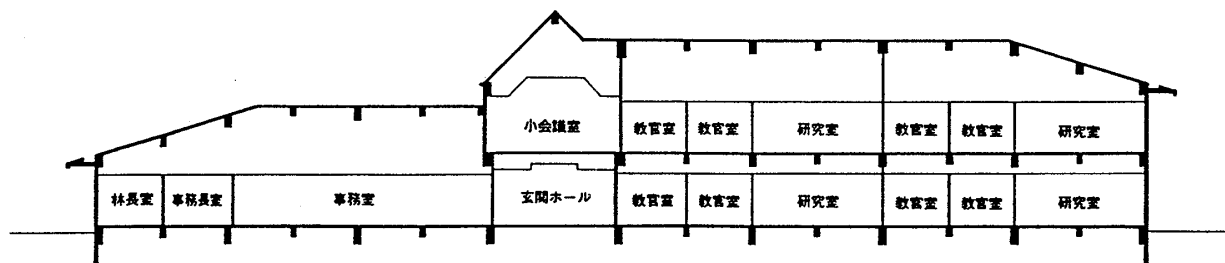




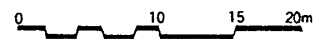
研究管理棟南立面図

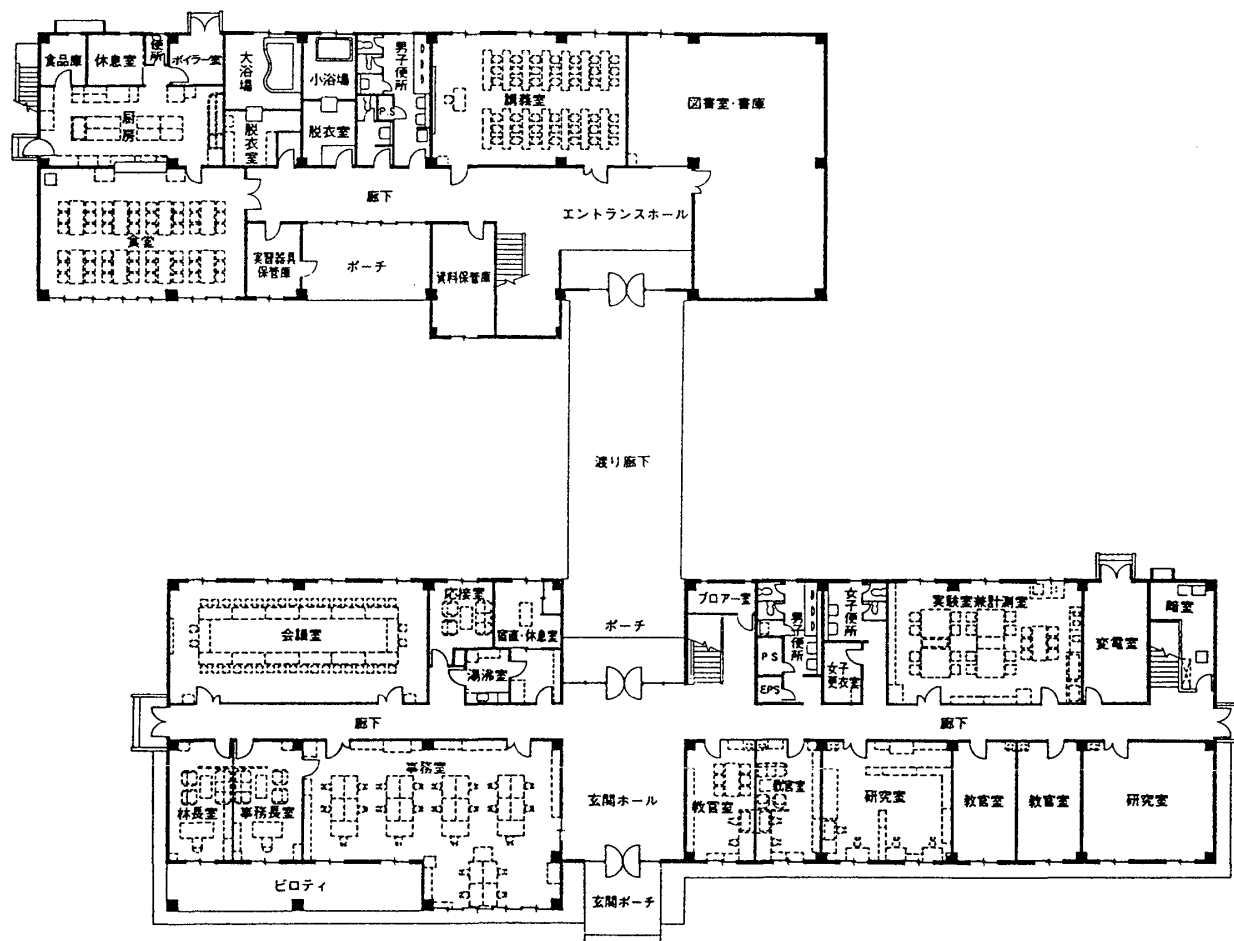


学生宿舎棟南立面図

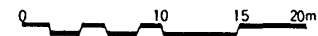


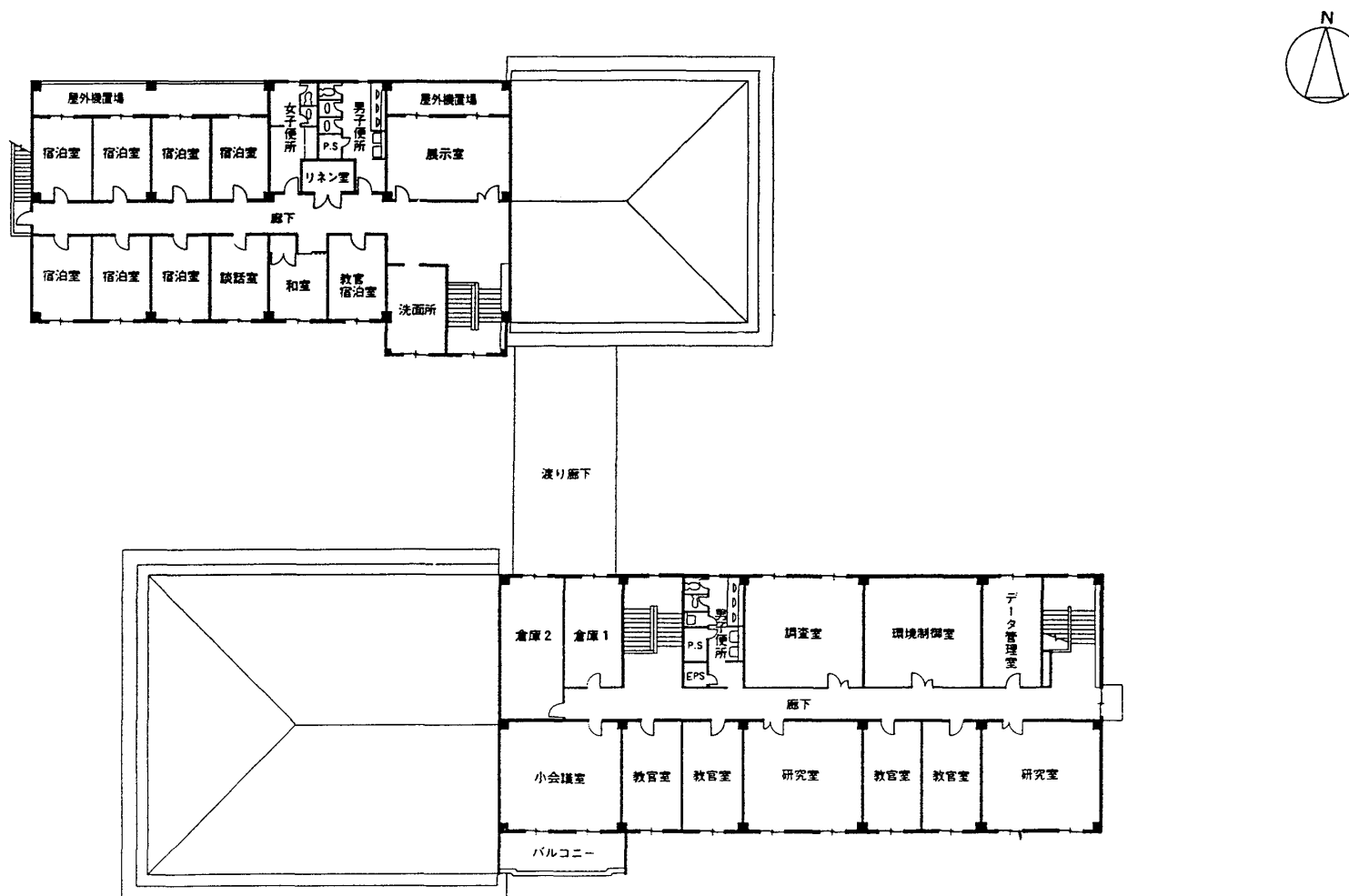
断面図



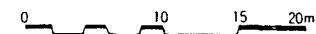


1 階平面図





2 階平面図

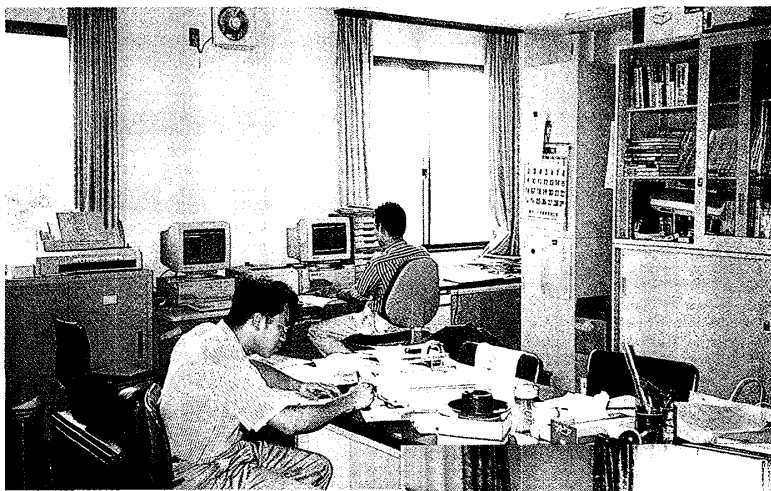




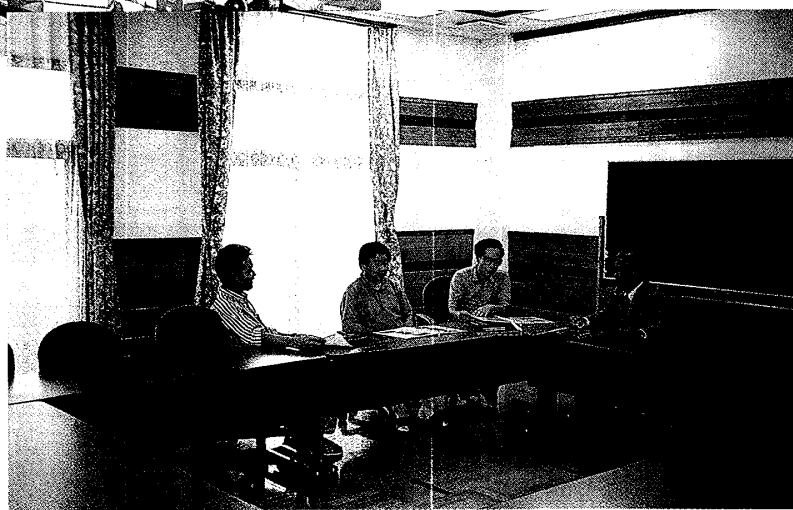
研究管理棟玄関ホール



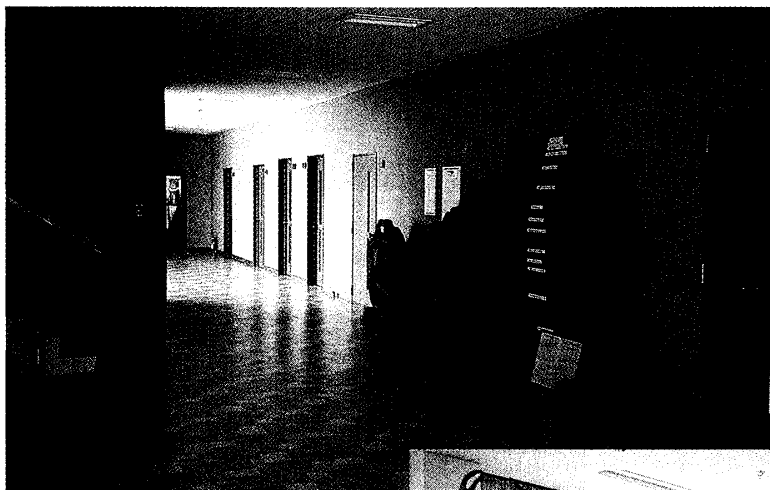
教 官 室



研 究 室



小 会 議 室



学生宿舎棟
玄関ホール



食 堂



宿 泊 室



展 示 室